

ブラッキー中島特別講義レポート

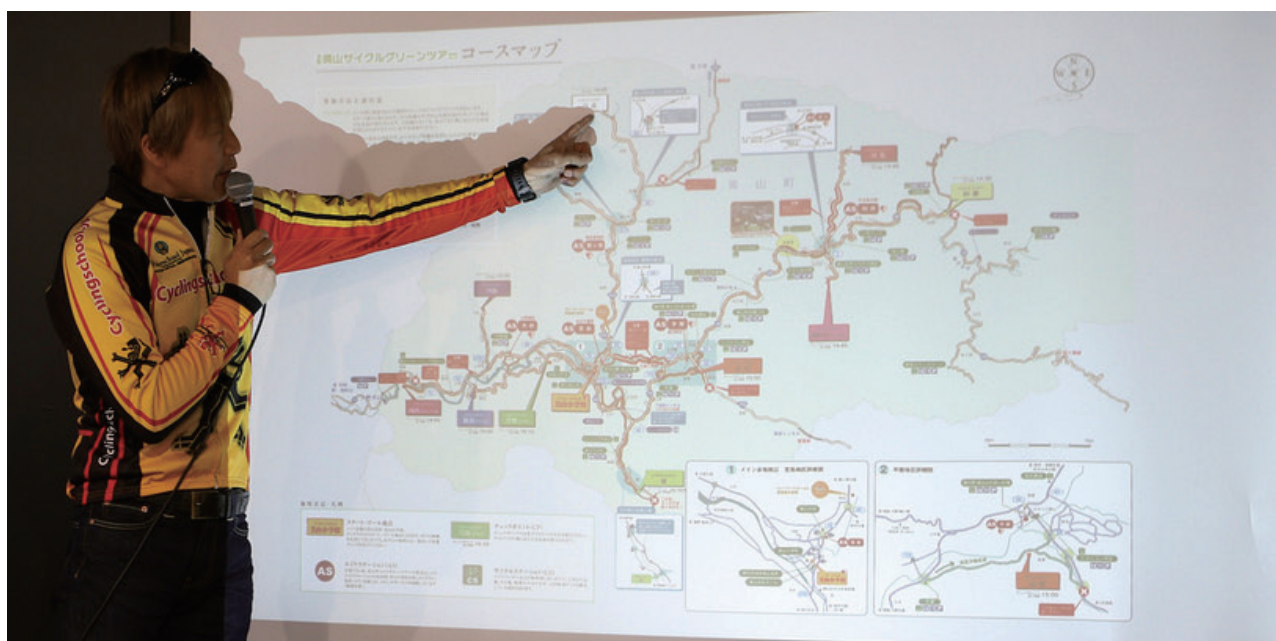
後藤祐希

2017年1月24日本学にて、ブラッキー中島隆章氏を招き、公開特別講義が開催された。「こんにちは。ブラッキーさんと言います」と、軽妙な語り口で始まった本講義は、最後まで笑いに包まれながら1時間30分に渡って行われた。

氏は大阪でデザイナー業をしながら2007年から子供自転車教室「ウィラースクール」の代表を務め、全国で教室を開催。2009年に京都市美山町に移住した。「京都美山自転車聖地プロジェクト」を立ち上げた際は、「京都美山サイクルロードレース」の運営を改革し、参加者を数百人から約1300人に増やした実績を持つ。その後現在に至るまで、自転車を中心とした数多くのプロジェクトを企画・運営。「自分たちの努力でどこまでできるか」を目標とし、行政

による補助金などの支援はほとんど受けずに参加費だけで運営しているのが特徴の一つである。2016年にはクラウドファンディングと寄付で資金を集め、自転車をきっかけに交流を生む寄り辺を目指した「CYCLE SEEDS」の建設に成功。自転車を軸とした幼児教育、イベント開催、地域振興など幅広い分野において第一線を走り続けている。

自転車人生が始まったきっかけは、子供だと話す。息子とのツーリングをきっかけに、生きる意味を自転車に教えてもらった氏は、だからこそ今、子供たちのために活動するのだという。「自転車は人生を豊かにする乗り物だ」と、その思いを活動を通して、伝え続けている。現在氏が行っている農業などのプロジェクトは、一



見自転車と繋がっていないように見えるほど幅広い分野に渡るが、この確固たる思いが全てを繋げているようだ。

氏が取り組んでいるプロジェクトの多くは、地域外の人々が地域の人々と交流できるような内容になっている。美山は全国の田舎と同様に高齢化が進み、人口減の問題を抱えている。それに伴い年々荒廃していく町に危機感を覚え、町を守るためには、外から人に来てもらい、地域の人々と交流できるようにすることが大事だと考えたという。両者が自然と交流し合う環境が、町のコミュニティを強固にし、ひいては町を守ることに繋がるのだと。「これから地方は享受の時代。とにかく人が集まる場があって、思いが具現化されれば、きっとこの町が元気になる。町が元気になれば人口が減っても他からやってくる人たちが助けてくれる。人口が増えれば、他からやってくる人たちがもっと楽しくなる。そういう良い連鎖を生み出したい」と語る。一方で「外の人を受け入れましょう」と、地域の人々に言い続けているという。氏が数々のプロジェクトを成功させている裏では、日々の交流の中で美山の人々が活動に対して気持ちよく納得できるように、話をし続けているのだ。地域の人々が地域外の人々を快く受け入れ、自然な交流を実現することは簡単ではないようだ。美山の人々にとって、「自分は一生余所者だろう」とも話す氏。氏が毎日地道に美山の人々と交流を続けることによって、プロジェクトがようやく実現する。その始まりを支える日常に



おける交流こそが、美山が変革した最も大きな理由だろう。

最後に、デザインの力について語られた。移住するまでデザイナーとして仕事をしてきたが、その時はデザインの仕事に疑問を抱いていたという。しかし美山で新しいことを始める際に、毎回デザインの力が必要になった。自分の考えを美山の人々に理解してもらうために作った映像や冊子などが、「伝える手段」として有効だったのだ。これまでの経験が無駄ではなかったと、美山に来て気付くことができたそうだ。加えて「自分はどう生きるべきかどうあるべきかを計画する、という意味のデザインのアプローチをまだまだやっていきたい」と語る。そして学生に向けて、こんな言葉を投げかけた。「今後辛いことも、めんどくさいことも、たくさんあるかもしれない。しかし必ず20年、30年続けてたらこの時のためにこれまでのことがあったのか、と思う時がくる。腐らずやってほしい」。私たちは今、ロングライドの始まりにいるのだ。